

# 佐伯史談

第六十五号

『郷土史研究』誌  
通算第八十七号

昭和四十五年六月十九日

## 佐伯史談会

事務局 佐伯市大字箱根字龍護寺別荘

研究

### 佐伯惟定と藤堂氏

会員 佐 脇 貫 一

さる四月二十五日、高木嘉吉会長が三重県津市の四天王寺を訪ねられ、佐伯氏歴代の墓碑を探索されたと聞き、非常に感銘した。高木会長は佐伯史談第六十四号に四天王寺を調査、その墓石配置図と、調べ得た墓碑面の文字を採録し、発表されているが、会長は佐伯に於ける佐伯氏最後の主である権頭（太郎）惟定の墓を求められたが、発見出来なかつたようで、『瑞祥院殿瓊嶽寺光大師』とされた佐伯権之助惟貞妻の墓と、惟定の妻ではないかと想定しておられる。しかし、歿年月が缺けていゝので、推定がきりではない。

佐伯氏系圖（緒方系譜考）によると、十四代惟定は佐伯太郎又は権頭と称して文禄二年大友氏改易によつて主家と運命を共にし、宇和島の藤堂高虎に従ひ、後伊勢に移

分らないが、天正十四年の豊蔭戦のとき若冠十八才と伝えられるから、享年五十一才？おつたのではなからうか。法名は宗忠功月大禪定門、藤堂家の記録では三千石をよめるおつていとといふ。

頼田叢史佐伯氏系圖によると、惟定の母は佐伯三河守惟堅の子大膳亮惟末、久左衛門尉惟澄の妹で、惟定は妻のついでに記録はない。その母は弟帯刀（後仁兵衛）と共に芸州毛利家（防長二州、萩へ毛利輝元）を頼り、備中に食邑をもちつたが、後毛利家を辞し備中足守の木下家に仕えた。（緒方洪庵の先祖）。惟定の次弟佐伯進士統幸は後又在衛門と改め紀州浅野家に仕えたといふ。

雑報 雑志は文禄二年における大友義統の不始末について次のように記している。

『小西行長が守居る

#### 本号内容

- 佐伯惟定と藤堂氏（佐脇貫一）……一
- 藤堂文信の條考と展示（高木嘉吉）……四
- 研究 藤堂（井田武雄）……五
- 佐伯の野球昔話（山内武雄）……九
- 佐伯と國水田浪歩（山内保）……三
- 四呼、五所明神の身主
- 国学者戸坂出浦（岩田正城）……八
- 吉備わが佐伯家（依家）（法伯利明）……一〇
- 後徳 藩主高島守平と歩く……一三
- 集会予伝、賛助寄附舞臺
- 新会員紹介など

如松、五万騎を以、到ニ安定館。朝鮮及漢南の兵、合せて二十万人、鉄桶の如く攻詰りたれ、以、行長不<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>城、固く守り大友義統に加勢を乞事、櫛の齒と引が如くなれば、鳳山の城に義統、長政の陣におりて未だ帰らざ。家臣志賀太郎親次、佐伯太郎忠茂(惟定)、田原与兵衛尉親盛などの大身、武略の侍は所々、要害を守り、田村美濃守、富来作左衛門、上野弥平、宗像掃部分らの侍大将の及七人ありて評議しけるは吾々今小勢を以、馳向いたり共、勝誇りたる数十万、猛勢を支えんこと危し、徒らに大死せんより引退き、後陣なる長政、香包、隆景、入勢と謀し合せ、防ぎ戦はんにほしめしと、(以下略)

こゝに右旗本建中ノ意見が義統を動かし、後陣の長政の陣に落ち、京城に引上げた。その女と鳳山城に遁れて来た行長が、大友方入士登が一人も居らぬのを見て、臆病神に一つつかれたうつけ首と義統のことを豊太閤秀吉に報告した。政治的事由から田勢力の拮据と考へていた秀吉は、これを機会に義統を誹責、政易を命じたものである。

この文祿の役に以佐伯太郎惟定は、志賀太郎親次と共に數百の兵をひきいて義統の軍に従い、釜山浦に上陸、金海府を攻略して忠州に入り、小西、加藤兩軍に繞りて京城に、かくて牙齧に進んだ小西軍の後陣として鳳山に駐屯していた。惟定がこゝ役でどのような活動をしたか記録されたものがない。

福原右馬助直高が太閤の使として義統の罪を責め、豊後台上げ(没収)を通知した。以文祿二年五月朔日、ついで六月義統は毛利輝元の家臣につき添われて日本に送還され、周防国大島に幽閉された。大友の家臣たちは思ひ思ひに帰国したが、なかでも六月二十二日帰国した本

付左兵衛統直は門司浦で入水自殺、これを聞いた父中務少輔鑲直は木戸城で自刃した。志賀太郎(小左衛門、關左衛門)親次(ちかよし)は朝鮮から帰国するや秀吉に召出され日田郡大井庄千石余を賜つたが、後故あって福島左衛門大夫正則に仕え、慶長年間安芸、備後兩國のうちで二千石を領した。女が志賀系團によると、親次の妹は佐伯惟定の室となり伊勢に住すとある。また親次の子小兵衛忠梁は細川家(熊本)に仕え子孫がある。

佐伯惟定が帰国後一志佐伯に帯つたかどうかははっきりしない。伝承では佐伯に帰らず從士高畑某らと佐伯に歸えり、故地に殘ることを希望する者を帰農させたり、その目とんどは昔は自ら採地を耕す生活に入つた。惟定は妻子を伴い、從士杉谷(帶刀)、長田(下總入道)紫かゝら數人を從えて、かねて知る藤堂佐渡守高虎の招きに応じて客となつた。

藤堂高虎は近江國犬山郡藤堂村の人で、父は源助高、越後守忠高の女婿である。幼名は与吉、後与古衛門と改め織田信澄に仕えたが、その滅後羽柴秀長(秀吉の弟)に仕え、家老となり二万石を給され藤堂佐渡守と称した。秀長の没後は嗣子秀俊に仕え、文祿征韓の役には秀俊の代理として水軍の將となり渡韓した。文祿三年秀俊が病死すると割裂して高野山にのりつたが、四年秀吉によぶ度され、知行五万石も加増され伊豫板島(宇和島)七万石に封ぜられた。佐伯惟定が客となり、あがて三千石と給されて客臣の列に加つたのはこの頃である。

慶長二年一月、秀吉は朝鮮再征の軍を渡海させた。藤堂高虎は長曾我部元親と共に第六軍に所屬したが、彼の本願は水軍であつた。征韓詳略に次の記述がある。

四十六日(慶長三年七月十六日)均(鮮將元均)率二百艘、樞二巨艦、漆川島、高虎兵鼓撃、高虎賜高利等、各首一

獲。高虎臨。發。馳。使告。加藤嘉明。嘉明稍後而至。戰既酣。嘉明見一巨艦列。戈砲。而待上。跳躍而上。手斬。數人。敵欲擊。嘉明。嘉明甥權七郎等。奮戰而遂奪。舟。嘉明欲。又跳上。敵別船。蹶而落。海。抱。袖而跳。若戰。又奪。二船。安治亦奪。敵船十六艘。從兵多戰死。高虎部下。依。伯。惟。定。家。兵。杉。谷。惟。之。長。田。惟。氏。半。亦。將。軍。敵。巨。艦。軍。柄。提。進。以。錢。搭。舟。之。艦。上。直。斬。敵。將。余。兵。區。艦。底。盡。屠。之。敵。兵。遂。敗。績。棄。船。上。陸。

慶長征韓の役には依伯惟定は藤堂高虎の部下として従軍、惟定の家臣杉谷惟之、長田惟氏らが奮戦している。一この年九月の海戦で毛利高政の船が沈没、藤堂孫七郎（高吉、高虎の養子宮内少輔高吉）の船に救われたが、惟定、高虎、高政三者には、何か因縁の系がからんでいるようである。」

関ヶ原の役後、藤堂高虎は伊予半國二十万石に封じられ、今治城主になった。もちろん佐伯惟定も家臣の一人としてこれに従ったおけであるが、慶長十一年高虎は和泉守となり、十三年には伊勢八郎、伊賀一圓三十二万石の大大名となった。佐伯系團によると惟定の子権之助惟治は藤堂家では四千五百石とついでいるが、佐伯氏も藤堂家の子石として伊賀上野城代（司城職）をつとめた。藤堂家の子石の初代藤堂采女元則の妻は佐伯権之助惟定へ藤堂家では権之助と称し、代々権之助あるいは権之佐と称した。の女であつた。この采女元則は初めの名を保母立助といつて服部半蔵則直（徳川家の服部半蔵正成）の一族だが同一人ではないの、伊賀の人である。寛永十七年伊賀の司城職となり、七千石を領した。

采女元則の子長門元佳（母は惟定の女）は慶安四年に家

督を継ぎ、采女と改め、貞享四年歿した。その子は元光（長門と称す）母は藤堂家の家老藤堂仁右衛門尉高怒の女。妻は藤堂藩二代大宮頭高次の息女。この元光の弟が佐伯権之助惟堂の子修理亮惟壽の養子となつた権之助惟信である。惟定と津の佐伯家の初代とすれば、二代惟重、三代惟昇、そして四代惟信となる。

藤堂采女家系團によると、元光の次弟惟信は佐伯権之助、元禄三年八月歿してあり、高水会長が採録された墓銘の「洞嶽院殿海翁了性居士」元禄三庚午年八月十一日、「大神嫡氏佐伯權佐惟治」。配置園に闕示された一番巨大な墓石へである。四代惟信が大守高次の孫であることと思へば当然である。採録されてゐる墓銘の年号からいへば「梅橋院殿天降淨真居士」佐伯真記惟采へ享保十八癸丑正月十日）は五代か六代ということになる。

藤堂一門は江戸時代を通じて文筆詩歌に秀れた文化人を出した。佐伯氏と深い縁にのたかる采女家の五代元甫は元光の六男で、元光が父采女元佳に先立つて歿したため、元光の三男高調が采女家三代を継ぎ、高調の子四代兵庫元柱に子が変わつたので、元甫が継ぎ采女元甫と称した。白谷翁、馬老人など号して、著書に三國地誌、元甫歌集などがある。この元甫は佐伯惟信の甥にあたる。

松尾芭蕉の主君であつた藤堂蟬吟は藤堂新七郎家の人。新七郎家は侍大将（士大将）五千石、蟬吟は主計良忠といひ、新七郎良精の四男、妻は藤堂采女元佳の女であるから、惟定へ孫女の婿といふことになる。芭蕉は当時甚七郎宗房といつたが、蟬吟の使としてしばしば京都に行き、蟬吟の師北村季吟に接して俳諧への眼をひらいたといわれる。

ふ五月や風の手争とゆふ涼み  
花にあかぬ敷やこちのうたふくろ

宗房 蟬吟

（主君蟬吟に節事し在當時の巻集の句）

以上は高木会長の津市四天王寺訪往の記に導かれて藤堂氏と依伯氏の関連を述べたものだが、伊賀上野の藤堂家のことについて、同地の郷土史家菊山当年男氏の著書に拠つた。

さて大友興慶記の一節に、

『歳に、予が依ふる大神の惟重は、先祖緒方三郎惟宗より、子々孫々大友家殿に仕たりき。然れども、今や分の由緒は、勢陽の地に未仕し玉ふ。仕國の時相隨し者共々、大半離群索居すといへ共、吾儕少々残り侍りぬ。』

と著者杉谷宗重が伊勢に住居した依伯氏のことについて少しばかりふれている。この杉谷氏は依伯惟定に従つて朝鮮の役に奮戦し、また伊勢津に移住した。この杉谷惟之の子孫が、その一族であるに相違ない。興慶記巻二の杉谷遠江守の事上の項に、遠江守宗故の二子杉谷次郎太郎（宗泰）弟次郎三郎（惟長）が依伯惟常に従つて高野山城攻略に拔群の功名をたてたことか述べられている。諱名その他から見て、宗重はこれらの人々の子孫、従つてこの伝承は杉谷氏に伝わつた氏族の由緒である。興慶記著者杉谷宗重は同書巻二十『鎮座龍』の事とのべた項に、自らも経歴にふれて、

『予豫て鎮西豊後陽を去り、勢陽（伊勢）に居住侍りき。累歳を経て、又旧里に再来し、鎮座の瀑布を見て、前きの詩の金言、今又太に深し。云々』  
と記し、自作の一詩を載せている。

日輝瀑布吐長虹  
六月雪花籠岩上  
千尺飛瀑一望中  
三冬雷鼓殿天空  
盧峯今見青山色  
季滴曾思瀾江

更忘二人間、興尤夥

若非仙境一定龍宮

鎮座は現在の池田である。宗重は伊勢に移つた後、何年かを経て再び豊後に来遊したものであろう。惟定が伊勢に移つたのは藤堂高虎が安濃津三十二万石に封じられた慶長十三年以後と思われるから、杉谷宗重が伊勢に住したのも同年以後であらう。大友興慶記の著述されたのは序文から推測して寛永十二年から十四年の間である。おそらく宗重は文筆の人として故郷の話を聞き、父祖の地とそれを目で見たいと思つたのであろうか。彼が豊後に再来したとき、どんな道程を辿つたかはわからぬが、興慶記の記述から見ると大野郡緒方、三重地、古戰場と訪ねたらしく、若しかしたら岡領（三重、宇目方面）から伏見領（河内）に入り、縁談の着き乗ったのであろうか。

（おわり）

偶感

文化財の保存と展示

伏見桃山城と吉野の史蹟を訪ねて

高木 嘉吉

先般私は、復元された伏見桃山城を見学し、又多年の念願であつた吉野の旧蹟を訪ねた。

伏見桃山城は昭和三十年三月に竣工したもので、東山山系の南端伏見桃山御陵と指呼の地にある。遊園地化した大広大な丘陵の上には、大天守閣と小天守閣が互に高く聳えあがっている。